

美術手帖

2008年8号 vol.60 NO.911

80年代アートシーンを築いたひとりの画廊主の人生

1980~90年代にかけて最も先進的かつ活動的だった画廊主と呼んでいいだろう。その佐谷和彦さんが初めて現代美術に触れたのは、戦後美術界の伝説的存在となっている南画廊においてだった。銀行勤めのかたわら、元来の美術好きが高じて、銀座の画廊回りを始めた。45歳で南画廊に入社したのは、画廊主の志水楠男氏に請われてのことだった。その後、独立して京橋に開いたのが佐谷画廊である。

現代美術のマーケットが未成熟ななか、プロモーションも含めた戦略を遂行しつつ、貸画廊ではない「企画」の重要性を誰よりも意識し、発言した。またシリーズ企画「オマージュ瀧口修造展」をほぼ毎年手がけ、2006年までに28回を数えた。図録への熱意は、展覧会のたびに編集された131冊という刊行総数にうかがえる。自ら味のある文章をものしたのは、旧制四高在学中以来の文学好きから。著書にはアート論にとどまらず、銀行勤めの経験を反映した財務に関する内容も多い。しかし、長男の周吾さん（シュウゴアーツ）に言わせると、「経済畑が長かったのに、本質はオプティミスト。たとえ苦境でも“絶対によくなる”ことを直感的に信じていた」。また、シュウゴアーツの作家で、80年代当時からアートと社会の関係に意識的だった森村泰昌さんは、「佐谷和彦氏とともに、我々は『美術の良心』というものをもつ精神の重しを失った。経済効果と話題ばかりが先行する現代の浮かれた日本の美術状況を、氏の業績を思い返しながら、我々は深く反省をしなければならない」と悼んだ。

2000年に銀座の画廊をたたんでからも、荻窪の自宅で仕事を続けた。その庭には、タイサンボクが毎年大輪をつけていた。今年は病状もあり手入れができなかったが、知人の植木職人が偶然に立ち寄り剪定してくれた。その数日後、佐谷さんが逝った日には半咲き、葬式の日には満開となった。「オプティミスト」らしい最期だった。